

相馬黒光没後七十年記念、安曇野市制施行二十周年記念

相馬愛蔵・黒光との思い出を孫・

四方満氏に聞く

四方満 一九四一年（昭和一六年）一月二日生まれ

三人兄弟の末っ子、姉二人

父 謙治（戦前から麴町区長、戦後中村屋代表取締役）

母 千香（愛蔵・黒光の次女）

一九六三年 慶応義塾大学卒業、信越化学入社

一九七二年 信越化学課長

一九七四年 中村屋入社

一九九四年 中村屋取締役

二〇〇四年 退任、多摩大学院MBA入学、

エディック（株）代表取締役

私の母（千香）が相馬愛蔵・黒光の次女です。父（謙治）は戦前から終戦の時は麴町区長でした。戦前の東京区には三五区あって、国会議事堂のある地区は其中で一番上位の地位にあり終戦時に追放になりました。レッドパージになり追放で仕事が出来ないことになりました。私は一九四一年一月十二日生まれで、姉二人の三人兄弟の末っ子でございます。ご希望の相馬黒光との思い出を私が幼かったものですから、たくさんお話が出来るかどうか分かりません。

相馬黒光は日記を書いていました。いつから書き始めたかは、よくわからないですけれど身近で見たたり触れたりして長い間書いています。それが黒光の三部作「黙移」「広瀬川の畔」「穂高高原」の元になっている



柳敬助《千香像》1910年

といます。三部作と言っても本人が筆を入れて書いたというよりは婦人の友記者である島本久恵さんが口述筆記をしたものです。島本さんは「婦人之友」の記者で、昭和の初めは最初記事取りに来たんだと思います。連載が始まったのは昭和九年ですから黒光は五十九歳で、そして私の想像では、昭和二年が中村屋にとって画期的な年でした。中村屋が変わってきたわけです。それはパン屋から菓子屋になって、同時にレストランを始めた。そういう中村屋が変わっていく背景に書かれたものと言えるでしょう。

お隣の新宿高野さんは大正十五年にフルーツパーラーが当たり今の果物屋になったんです。中村屋の創業は明治三十四年ですけど、高野さんは十八年古く明治十六年から創業していろいろの歴史を積み重ねてきたわけです。どちらも関東大震災を免れ残ったわけです。下町は被害が大きく新宿辺りは揺れたんですけど残ったということです。関東大震災は大正十二年ですから、昭和二年までには四年ほどあります。その間中村屋は構造改革をしたり、高野さんは甲州街道の出発点ですから、果物がたくさん獲れる甲州とのネットワークを生かして変わっていったんです。今でも高野の幹部の方と年齢も近いし私は新宿ロータリークラブの会員であり高野も会員です。新宿について語るには、紀伊国屋と合わせて御三家と言われる所以です。紀伊国屋は元々炭屋さんでありました

が鉄道の進化に伴い変わっていったし、中村屋はパン屋から菓子屋に転身しカーリー・ボルシチのレストランを初めて行ったことです。その当時は愛蔵・黒光は彼らと手を取り合って基礎を創って行ったのが今の繁盛の礎になっています。紀伊国屋には田辺茂一という作家が現在の大きな書店になされました。田辺茂一さんと私の母は小学校の同窓で親しくさせていただきに二人でテレビに出たりして有名人の仲間入りにさせていただきました。

相馬夫妻と私の関係については、私が中学二年の時（昭和三十年）に相馬愛蔵が亡くなり、翌三十一年の今から七十年前十五歳の時に黒光が亡くなりました。私とすれば物心が付き始めた頃ですから、愛蔵が何をした人物か、黒光が何をしたかについて知ったのは私が中村屋に昭和五十年に入社してからのこととなります。

昭和十八年に、戦争が始まって二年日本の敗戦の色が聞かれはじめきて奥多摩の大悲願寺に疎開をしたんです。自宅から母親に連れられて、床に伏しているラス・ビハリ・ボースの原宿の自宅に別れの挨拶に行きました。三歳の子供ながら悲しい別れの雰囲気を感じています。相馬愛蔵・黒光、叔母の相馬睦、ボースの娘哲、私の姉二人と私の七人でした。私が一番下ですし愛蔵と私が男ということになるんです。その時にも黒光は毎日日記を書いていました。ただそこに再三登場したのが、私と黒光の目玉焼きエピソードです。「晩霜」に似たようなことが書いてあるかと思えます。戦争中ですから物が無いわけですが母が物資の買い出しに行つてそれらを担いで大悲願寺に都心から電車の乗つて持つてきました。卵が一人一つ食べられずに、病身の黒光のためにようやく卵があっただけでした。食事はパン或いはご飯のときに目玉焼きが付いていました。周りには付いていないので、一番下の私には目玉焼きの黄味をくりぬいて周りの白身だけ私に食べさせてくれました。それが楽しみでしたが姉

たちは不平を随分言っていたようです。また、大悲願寺には地元の人馬を含めて馬が何頭かいて、私も物好きだったもので飼ひ葉桶に餌をとつて入れるというようなことをしていました。「満は飼ひ葉桶を見て一度で良いから腹いっぱい食事をしたい」と日記に記され黒光は不憫に思っていました。また山に山菜取りに行つた思い出もあります。相馬愛蔵は蚕です。「蚕種製造論」などの本を出してしまつて奥多摩の山には蚕の桑があり寺の隠居場で一番大きく何段にも分けて蚕を飼つていました。私も虫は得意でないですけども蚕が大きくなつたらどうするかと言つて新鮮な桑の葉を私が当番として育てていて集めていました。女性には糸を紡いでいて軍人への物資として送られていました。

戦後夫妻の新居として調布に黒光庵を建てまして、土地には二代目相馬英雄社長の別棟があり隠居している相馬愛蔵・黒光と叔母が住んでいました。私は夏休みも冬休みも小学三年生から毎年行っていました。それは二代目の英雄社長がシェパード犬の会長でもありましたので大きなシェパード犬がいたんです。私は犬好きですから遊びに行きました。昼間は英雄社長は不在、そこで書齋に入つて、野村胡堂の小説「銭形平次捕物控」、清水次郎長或いは講談本があつてそれを読み夏休みはそれを読みに行ったような感じでした。当時のことをはつきり覚えてます。愛蔵は老人になり、黒光と孫の私と一緒に蚊帳の入つて私を真ん中に川の字になり今日の銭形平次の話はどんな話だったとか次郎長は凄いと興奮して話していました。時々母が来ると「満は次郎長がお蝶に惚れたとか言っているけれどほんとうの意味がわかっているのかしら」と思っていたようです。子供ですからその本に書いてあるまま読んで話していました。結構可愛がられていました。愛蔵は疎開時と同じく蚕の飼育に力を入れ私は手伝いをされました。

黒光が店に出ている時の呼び名は「おかみさん」で通つていて店員に

は名前で言うことは許されませんでした。愛蔵は「大旦那さん」と呼ばれ愛蔵・黒光は隠居生活の中では戦前に中村屋にいた人たちを大事にしている、その人たちが「愛光会」を作り一年に一回その集まりを調布の黒光庵で行っていました。愛蔵・黒光夫妻と私の母親が主役になりました。母は昭和五年から十四年頃までは中村屋のお帳場に立って切り盛りをしていました。当時は鑑みると店の成長期で忙しく、講演・執筆活動が多く、幼児が死に途方に暮れる状態が身内からも認められるほどでした。母は商売人らしくテキパキしておりお客にも従業員にも慕われていたようです。きつい母親でしたが、ずいぶんいじめられたり怒られたことが懐かしい思い出になっていました。私は小学生でしたから用意された料理を食べながら聞いていました。夜は川の字で寝ていました、蚊帳の中で川の字で入ったのは孫の中では私だけでありましたようです。身内からすると特別ではなく普通の人と同じでした。中学に入ったとき、黒光は寝たきりになりました。中学三年三月に亡くなりましたが私の高校受験時と同じ時期なので、「よくあなたが希望校に入学したのはおじいさん、おばあさんが見てくれたから学校に入れた」と言われました。周りからも両親からも、爺さん、ばあさんも普通の孫としてお付き合いをしていました。

後に私は中村屋に昭和五十年から平成十六年まで三十年いましたが、最盛期は昭和四年から十六年ころの戦争前が一番勢いがあったと思っています。昭和二年から徐々に伸びてきた、その中の一番はボースのインドカリーで徐々に伸びていったと思います。ラス・ビハリ・ボースはインド北東部のベンガル出身で、いわゆる都心地区でないことが良かったと思います。第一次世界大戦時に日本に亡命をしたボースが偽名で神戸に上陸し頭山満に引き取られ愛蔵・黒光が匿うのですが英国から指名手配を受け長い間身を隠しながら生き延びるわけです。長女を嫁がせ二人

で三三か所に転居し身を守ってきました。ボースと妻俊子の転居生活は大変な苦勞があり、目立たない、日の当たらない場所での生活での生活が始まるわけで、近所でボースが外国人であることがわかると引越し命を守る苦勞をしておりますが子供二人生んで二十八歳で肺病になりこの世を去りました。亡命後約十年入ると状況が変わってきました。その間に日本語の勉強が力ついてきて二人の子供にも接するし、日本語でインドの話を出版しました。生活に馴染んできた際に東京の街に違和感を覚えました。それは母国のカリーでないものが通っており、ボースはインド本国のカリーライスを伝えたい強い希望が出てきました。それが昭和二年の中村屋の事業拡大に繋がりました。黒光にとつて、二人の子供にとつても大きな転機になりましたと同時にボースは暗い生活時、最愛の妻に先立たれた時にしっかりと地に足をつけていたことになり身内の一人として尊敬をしました。

この前後は愛蔵・黒光に大きな変化がありました。黒光は小さい頃から文学に興味を持っておりました。身内にも文学者がいたり、藤村らの生徒としての関係やドラマになる題材の事件が起こりました。婦人之友の記者となり詩人河井醉名と結婚した島本久恵は黒光と親しくして店に出入りをしていましたが、身内のこと、店のことなど、本来の夢である著作活動のお手伝いをしていました。第一作の「黙移」は黒光が作家として、二作目からは島本久恵のお手伝いがだんだんと深くなったようです。私は昭和五十年中村屋入社の際母親から島本さんのところへは盆と暮れには必ず行くように言われ、目黒の島本家の自宅にお伺いすると半日は話をしていました。

愛蔵は事業が成功し周りからも多くの賛同者が出てきました。ベストセラーになった「一商人として」は我が想いに加え全国或いは海外の情報をも身に付けて書き上げていったものです。一例をあげると、少年店員

を採用し自社の教育学校に通わせ独立を勧めました。それが「愛光会」に繋げるわけですが同時に二代目三代目には批判的な厳しい言葉述べています。二代目安雄社長も戦前時は中村屋との関係は少なく終戦後復興から社長と呼ばれるようになりました。昭和四十四年三代目雄二社長が解任されました（私は当時信越化学で在籍なので無関係）。私が入社する昭和五十年時までは事件のくすぶりがあり、入社後私なりに事実関係を調べたましたが残念ながら予想以上の内容になっていました。愛蔵の二代目、三代目への批判が現実的には身内のこととなり残念な結果となっていました。

昭和二十七年渋谷区代々木二丁目に一家で引越をしました。元朝日新聞記者であった韓国の人から譲り受けました。小学校六年であり転校せず自転車通学をしました。転居の理由は姉二人の環境が良いことであり、五〇〇坪の敷地から二〇〇坪の小径の奥に居を構えました。終戦時は中村屋と黒光の共有の名義であったが分画され黒光の関係者の名義にされていました。近隣に市川房枝代議士の自宅と事務所があり、両親は一時親しくなったが昭和三十七年以降犬猿の関係となり、父が死んだ後挨拶に行くと「あなたのおばあさまにはお世話になったが両親には意地悪されるだけだった」とすごい剣幕でした。無論解決されたが令和四年まで半世紀を要しました。黒光名義の土地は他の土地でもあり解決は私の人生に大いに役立ちました。これらは黒光の意思によるもので時代の変遷でかけ離れていきました。

安曇野市穂高の相馬家の実家には定期的に訪れていました。犀川での水遊び、大王農場、碌山美術館等子供頃決まったコースがありました。いずれの時も本家に宿泊、立派な布団で歓迎されました。七年前までは安兵衛当主との話が弾んで徹夜になることが多々ありました。黒光が嫁ぐための洋館、持参した洋画、オルガン等地元にはどのように受け入れ

られているのでしょうか。愛蔵・黒光健在の時には年が小さかったためそれらに思いを及ぼすことはできませんでしたが、しかしながらこれからの五十年、百年に向けて見直す時期と考えており、愛蔵・黒光ともそれを望んでいると思います。

二〇二六年一月二十四日

四方 満